

丸山静雄 著

インパール作戦従軍記

— 新聞記者の回想 —



岩波新書

269



丸山静雄著

インパール作戦従軍記

——新聞記者の回想——

岩波新書

269

丸山静雄

1909年神奈川県に生まれる

1936年東京外国語大学卒業。朝日新聞社入社。

アジア各国特派員、論説委員を経て、退社。1978年国際商科大学教授

現在一国際商科大学客員教授

著書—「ベトナム戦争」(筑摩書房),「論説委員」(筑摩書房),「東南アジア」(みすず書房),「アジアを考える」(アジア経済研究所),「インドシナ物語」(講談社)

インパール作戦従軍記

岩波新書(黄版) 269

1984年6月20日 第1刷発行 ©

定価 430 円

著 者 丸 山 静 雄

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 巖 波 書 店

電話 03-265-4111

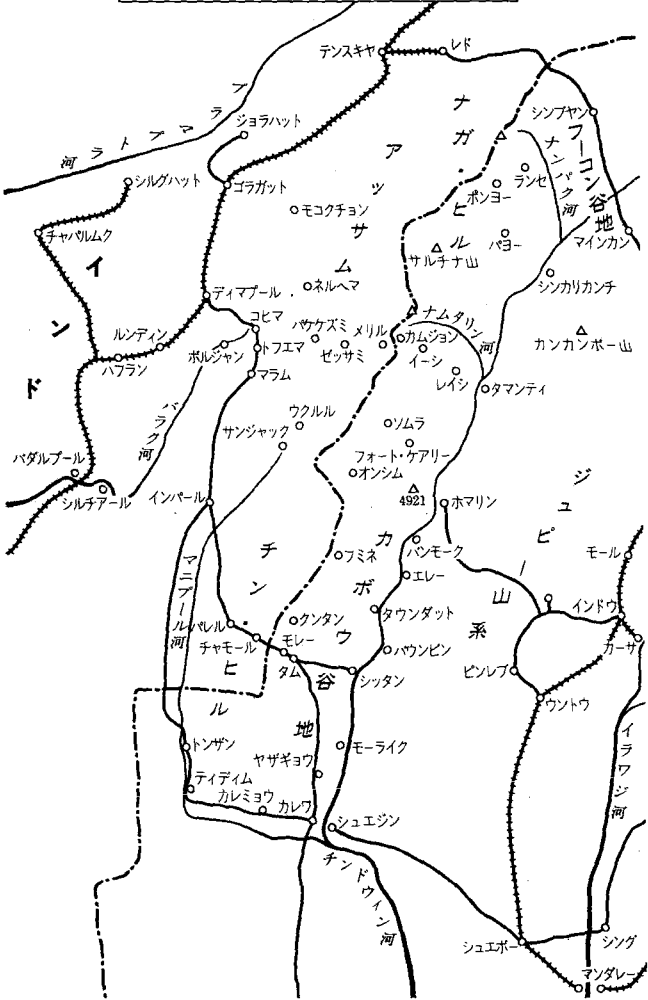
振替 東京 6-26240

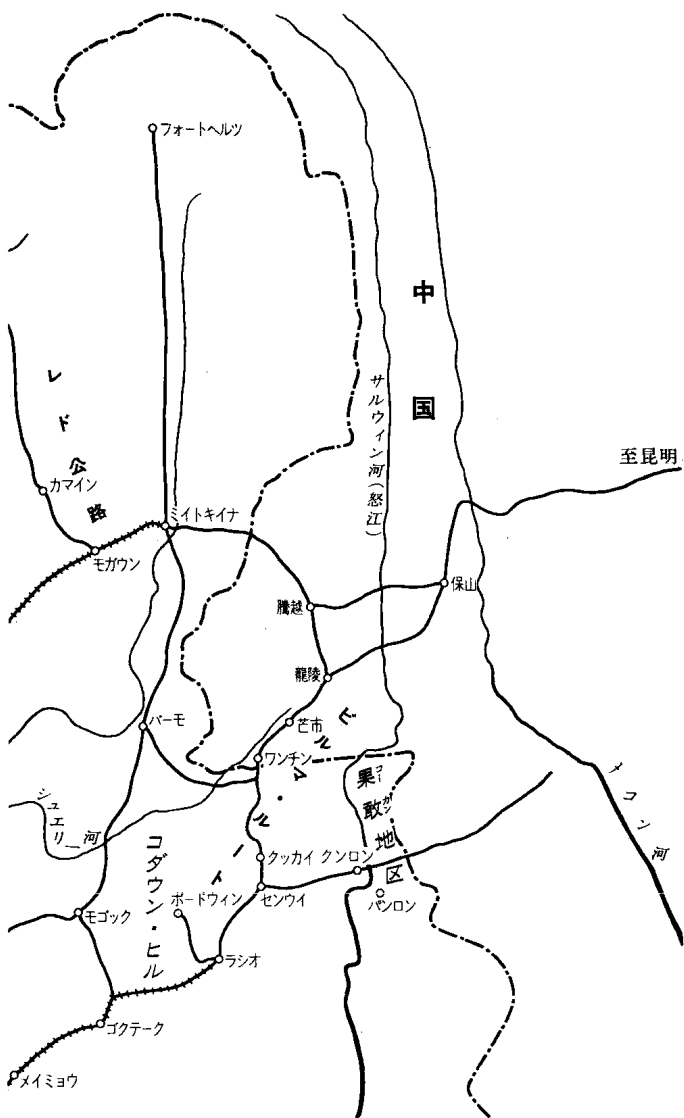
印刷・理想社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

北ビルマ要図 (1944年4月)





目
次

はじめに——四〇年めの従軍記	1
----------------	---

一 インパール従軍	7
-----------	---

埃の進軍	8
------	---

作戦は行き詰まる	20
----------	----

チャモールの生活	27
----------	----

ジャングル野菜をすすりながら	41
----------------	----

空白の戦場	53
-------	----

二 インパール作戦考	65
------------	----

ビルマ作戦の五段階	66
-----------	----

ビルマ軍とインド国民軍	81
-------------	----

四人のサムライ	88
---------	----

仕掛けられた罠	101
---------	-----

目次

誤解と誤算の戦争	113
三 敗走千里	133
真空地帯	134
カボウ谷地	148
濁流に阻まれて	160
遙かなりチンドウイン河	171
草むす屍	181
おわりに——インパール開眼	193
あとがき	203
参考文献	205
太平洋戦争関係年表	209

はじめに——四〇年めの従軍記

インパール体験

インパール前線から辛うじて生還したあと、わたしはこの作戦について書いてみようと思つた。生命をかけて従軍したのに、新聞記者として一行の記事すら書くことのできなかつた「書かざる従軍記者」の鬱勃たる執念でもあつた。ところが友人や出版関係の知人は賛成してくれなかつた。口をそろえて暗すぎるという。敗戦で打ちのめされた人たちは少しでも明るい明日を待望している、もう過去を忘れたい、敗け戦の話は御免だという気持が強い、インパール作戦はあまりに暗い、救いがないというのである。

それから十数年を経過して、わたしはふたたびインパール作戦をまとめてみようと思ひ立つた。こんどは、いまさらインパール作戦でもあるまいと、友人たちはいった。というのは、この間、インパール作戦についてはかなりの本が書かれ、インパール以外のビルマの諸作戦についても数多くの本が刊行されていたからである。戦時中に書かれた戦記ものではビルマに関するものが多かつたが、この傾向は戦後も変わらず、地域的にはビルマが最も多く戦争の題材

としてとりあげられていたような気がする。それだけに読者は食傷気味で売れないだろうというのである。やむなくわたしは思いとどまった。

三度目に書く決意を固めたのは前著「インドシナ物語」を書き終わったあとである。友人たちはいぜんとして消極的だった。これより先、わたしはアジアとの四〇年を越すかわりあいを書いておこうと思つてペンをとりはじめたが、どうしてもインパールに関する部分が圧倒的に多くなり、全体としての本のバランスがとれなくなることに気づいた。インパールは、わたしにとって「業」のようなもので、これを書かないうちはペンが先に進まないのである。

考えてみれば、インパールを含むビルマ各地の戦いについて数多く書かれていることは、それだけ人々を惹きつけるものがそこにあつたということであろう。事実、インパール作戦は太平洋戦争の集約であつたし、古来、日本が戦つてきた対外戦争の縮図を見る思いがした。書かれたものの多いのは必ずしも人びとの要求が満たされて関心が薄くなることではなく、むしろ古い読者層は関心をますます深め、さらに新しい読者層が開拓されつつあることでもあらうと、わたしは考えた。

従軍記者

従軍記者といつても、さまざまのタイプがある。マレー半島を「怒濤」のように進撃してシンガポールに「入城」という、まことに花々しい、当時としては新聞

記者冥利につきるといわれたようなものがある(酒井寅吉著「マレー戦記」)。急進撃の部隊を追いつつも、リュックが肩にくいこみ、紙一枚の重さに泣いた記者もある(末常卓郎著「従軍記者」)。あるいはニューギニアに特派されたものの、日本軍は敗走に移っており、部隊とともに辛うじて死地を脱出したものもある(岡田誠三著「ニューギニア血戦記」)。わたしの場合は「戦争のあと」を見る結果になった。たしかに従軍記者としてあまり経験したことのないケースであったろう。

戦後三〇年ほどして、わたしが従軍していた弓兵团山本支隊の本部付だった縣少尉あがたに出会ったところ(当時、長野県大町市の市長に選ばれていた)、かねがね縣少尉は当時のわたしの行動を不思議に思い、いつか直接たずねてみたいと思っていたと、わたしに話しかけてきた。そのころ、わたしは山本支隊本部裏側の尾根道の下に、英印軍の遺棄していったテントを張って、ただ一人「住んで」いた。将校であれば当番兵がついて食事や起居の世話をしてくれる。ところが、わたしは一人ぼっち。新聞記者だというのに、支隊には記事になるようなニュースも話題もない。仮にあったにしても送る手段がない。食糧はだんだん底をつき、飢餓がせまってくる。ところが、わたしは引き揚げるでもなく、じっと一人でいる。それを見ていて哀れでならなかったが、それだけに、どうして、こんなところに残り、いつまでも頑張っているのだろうか

かと、不思議でならなかったというのである。

わたしは、それほど深刻に考えず、「そこに兵隊がいる」からと答えた。また戦争というものを、この目でじかに見ておきたかったから、ともいった。縣少尉は、わかったような、わからないような顔をしていた。それから間もなく、わたしは惨たる敗走行に移るが、部隊本部の将校から見れば、わたしの行動は不可解だったにちがいない。奇妙な従軍記者と映っただろう。そういう従軍記者も存在したわけで、それは、それなりに記録しておく意味があったらうと、わたしは考えた。

戦争は一〇年経過しないと書けないと、いわれたものだが、一〇年では短かすぎるような気がする。ものごとは一定の年月において、はじめて客観的に見るゆとりが出てくるものであるが、戦争の場合は、とくにそうだと思う。

ところが、戦争がまだほんとに清算されていないのに、早くも戦争を過去の出来事として忘れようとし、あるいはそこを避けて通ろうとする風潮のようなものがある。むしろ最近では軍備を増強し、仮想敵国をつくりあげ、敵対意識をあおりたて、ふたたび戦争への道を歩みつつあるかのような動きさえあらわれはじめた。そこに大きな危険性を感じ、わたしは放っておけないと思った。

書くこと
の意味

インパール従軍について書いてみようと思ったとき、わたしを最初に駆りたてて書いたのは、どちらかといえば自己顕示欲だったと思う。従軍記者として最前線にありながら、一行の記事も書きえなかったことへの痛憤の思いが消えず、戦いの悲惨さ、そうした悲惨さが兵隊にしわ寄せられる戦いの実相は、わたしこそが見とけたものであるという一種の「おごり」が心のなかにあり、それを書くことによってわたしの存在を誇示したいというひそかな願望があったようである。

戦争について書くとは自らを語ることであり、それは畢竟、自己の戦争体験を時間的経過のなかで濾過し、一人よがりを持象して純化させることであろう。戦場という極限の状況に埋没した自己中心の限定された体験を現代史のなかに据えて普遍化することであろう。ところが、そのころ、わたしは経験こそがなにもものにもまして貴重だと考え、それが一人よがりになる危険性に十分気づいていなかった。それを知るには時間が必要だった。

二回目に筆をとろうとしたときには、十余年の歳月がわたしの視座にも若干のゆとりと客観性をあたえてくれたようで、自分のこと、日本の兵隊のこと、戦争のなかでの日本の立場に関心を奪われていた従来姿勢から一歩離れて、わたしは他者のこと、アジアのことをより鮮明に考えるようになった。それまでは兵隊や民衆を弱者の位置におき、被害者としての立場から

戦争を見ていたが、アジアのことに考えが及ぶとき、それはより明確に侵略者としての日本、加害者としての日本人を再発見することにほかならなかった。大東亜共栄圏は虚像であった。わたしは慄然とした。

三回目の発見は、インパール作戦は無用の戦いではなかったかという反省である。そのことは、これまでもときどき、ふっと想念のなかに浮かんで消えていたが、英軍側の資料を調べ、当時の戦局全般に目を通して、そのことに思いついたり、無用の戦いであったことを思いきって書くことこそがわたしにあたえられた課題ではないかと考えた。

それには大きな勇氣を必要とする。死線のなかから辛うじて生還した人たちはなんというだろうか。遺族になんと説明するのか。わたしは、さんざんに迷ったすえ、あえて書くことになった。おそまきながら、わたしはまたジャーナリズムの責任についても真剣に考えるようになった。二度までも思いとどまり、三度目になってようやく書くことになった意味は、あるいは、そのへんにあったかもしれない。インパール作戦については、これまでも何回か、わたしは短文を書いているが、それを一冊の本にまとめあげるのは、これがはじめてである。四〇年めの従軍記ということになるが、実は四〇年をかけてようやく私なりの従軍記の形ができたというところでもあろうか——

一
インパール従軍

埃の進軍

マンダレ
ー街道

一九四四(昭和十九)年三月、わたしはインパール作戦に従軍するためラングーンに着いた。ラングーンは暑かった。それまでに通過してきた台北、マニラ、サイゴン、シンガポール、バンコクのどの町よりも暑かった。湿気もあった。大きな扇風機が天井でブルンブルンとまわり、濁った空気をかきたてた。すでに作戦ははじまっており、わたしはいそいでマンダレーに向かった。そこから作戦軍(第十五軍)司令部のあるメイミョウに行くためである。

ラングーンからマンダレーにいたる間は広漠たる大平原である。ビルマの平原は乾季にはいと、乾いた土が灼熱の太陽に照りつけられて埃ほこりに変わる。埃といっても白く、降りはじめの雪のように細かく、さらさらと軽く、それが路上では二〇センチから三〇センチも積もる。まさに雪のように積もるといった感じで、ふわふわと、粉のようでもあり、綿のようでもある。歩くとき、埃が舞いあがり、たちまちヒゲもマユも髪も真っ白。ここではサンタクロースは埃の

1 インパール従軍

なかからあらわれる。牛車で進むと、車輪が埃をかきたて、かきちらし、あたりを白一色の世界に変える。ジープの走っているのを遠くから見ると、車が進むにつれて埃がむくむくとわき上り、それが細く、長く道を包み、一本の白線をスーッと引いてゆく。

鼻はつまり、口のなかはずらずら。ギイギイと、牛車の軋む音が聞える。ハッとする間もなく、大きな牛の頭が目の前にヌツとあらわれる。輸送部隊の隊列が近づく。先頭車は車体をあらわすが、第二車以降は埃にかくれて姿を見せない。一〇〇台、二〇〇台の牛車が埃のなかからあらわれ、また埃のなかに吸いこまれてゆく。まるで埃の塊りが音をたてて進んでゆくようでもあった。行けども行けども埃、埃の進軍である。

道傍には大きなネムの並木がつづく。埃の地帯を抜けると、真紅の花が目にしみる。夕方、森の入口に近づくと、ようやく、さわやかな空気が流れてくる。はじめて生きかえった心地になる。森のなかには大きな木が根もとから枝の先まで光り輝き、まばたいていた。何百という豆電球を飾りつけたようだった。よく見ると、ホタルが木いっぱいについて、光を点滅させているのである。まるでホタルが木になっていてようだった。夜になると、篠つくように雨が降り、激しく雷が鳴った。沛然たる豪雨のなかに光芒一闪、轟然と雷の落ちる音がした。木が砕け、草が飛び散った。